

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：13801
 研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
 研究期間：2016～2019
 課題番号：15KK0047
 研究課題名（和文）東シナ海域の基層文化と人々の生活：日韓境界領域の事例より（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Common Cultural Foundations and People's Lives in the Maritime Areas of the East China Sea: Comparative Case Studies of the Japan-Korea Borderlands(Fostering Joint International Research)

研究代表者
 金 明美（Kim, Myungmi）
 静岡大学・情報学部・教授

研究者番号：50422738
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,200,000円
 渡航期間： 16ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、基課題「東シナ海域の基層文化と人々の生活：日韓境界領域の事例より」（基盤研究C、15K01870）を発展させ、東シナ海域の「基層文化」を中国の事例を含めて再考するために中国でフィールドデータを収集することである。そのために、中国に滞在して調査準備を進めた。その結果、中国の共同研究者の協力の下に、古代或いは古代以前から海域交流を通して日本列島・朝鮮半島との関わりが深い中国江南（東南地方）の村でフィールドワークを実施し、日韓中の国境を越えて広がる共通の文化的基盤を再考するための基礎資料を収集することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、日韓での調査データに加え、中国での調査データを収集したことで、歴史学を中心とする文献研究が主流の海域研究において、人々の生活文化の観点から文献等の解釈を進める上で寄与しうる基礎資料の提示に結び付けることができたのではないかと考える。
 社会的意義としては、従来の国民国家の枠組みを基調とする「地域研究」や比較研究で見落とされてきた日韓中共通の文化的基盤の存在を示唆したことで、グローバル化時代に一層重要となる国境を越えた交流の推進や平和構築に寄与しうる点があるのではないかと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to make my preceding study develop and to collect field data for reconsideration of "fundamental cultures" in the East China Sea area including Chinese cases in addition to Japanese and Korean cases. Then I had stayed in China and prepared for conducting fieldwork in villages of the southeast area of China. This area has had close relationships to Japan islands and the Korean peninsula through exchanges by sea since pre-ancient times. As a result, under the cooperation of Chinese co-researchers, I conducted fieldwork and collected field data for reconsideration of common cultural foundations which may spread over the borders among East Asian countries.

研究分野：文化人類学

キーワード：東シナ海域 基層文化の再考 日韓中の事例検討 生活文化 同年齢集団 キンドレッド ムラの宗教的センター 女性の役割

様式 F-19-2

1. 研究開始当初の背景

本研究は採択中の科研費の研究課題「東シナ海域の基層文化と人々の生活：日韓境界領域の事例より」（基盤研究C、15K01870）を基課題として発展させたものである。

(1) 基課題の目的と課題：

基課題の目的は、生活文化の観点から、国境を越えて東シナ海域に広がる「基層文化」再考のために設定した4つの指標の有効性を事例検証することである。具体的には、日韓の境界領域（済州島、朝鮮半島南部、北部九州の島嶼部）で、現在も地域の共同生活が維持されているムラを中心にフィールドワークを行い、①同年齢集団・関係、②キンドレッド（父方・母方の親戚関係）、③人々が自主管理するムラの宗教的センター、④女性の役割（③との関連）についてのデータを収集し、検討する。その成果の一部はすでに、韓国の研究者の執筆協力も得て先行研究者と共同で編集・翻訳し、日韓両国で出版した図書の中で発表した（原尻英樹・金明美共編 2015『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』、하라지리히데키・김명미 엮어옮김 2017『동중국해역에서의 한반도와 일본열도:그기층문화와 사람들의 생활』Minsokwon archebooks079。後者は出版社学術シリーズ79巻）。

このように基課題では、境界領域での事例検証を通して、国家的枠組みを前提とする従来の「地域研究」を相対化し、東シナ海域の「基層文化」を再考するためのデータの収集と検討を進めてきた。しかし、それは日韓の地域事例に留まっており、より広い観点から東シナ海域の「基層文化」を再考していくためには、中国を入れた日韓中の地域事例の検討が課題となる。

(2) 基課題からの発展：

基課題を中国の事例を含めた研究へと発展させるために文献研究を行った。その結果、中国の村落でのフィールドワークに基づき、東シナ海域の「基層文化」に関して深い洞察を行っているのは、管見の限り、鈴木満男 1994『環東シナ海の古代儀礼』であった。この研究を踏まえば、東シナ海域の「基層文化」を論じる上では、「漢化」以前の中国、特に江南を中心に展開した古代の越文化に遡る歴史認識とそれが人々の移動や諸地域間交流を通して各地に伝わりつつも、各地独自の文化が形成されていった「グローカル」な展開への考慮が必要とされる。

実のところ、このことは文献研究だけでなく、現地調査からも認識していたことであった。例えば、済州島では蛇神への忌避と崇拜という両極端な反応に出会った。忌避は特に近代以降に強化されたというが、鈴木氏も指摘するように、蛇信仰は古くは越文化に遡り、中国では「漢化」による文明化の過程で道教や仏教、儒教など教義化された諸宗教により否定や変形（龍信仰等へ）されてきた。済州島の人々の蛇神に対する相反する態度にも、これと類似した、近代化以前に遡る地域独自の文明化の影響があったと考えられる。とはいえ、現在も生活文化に深く根差した蛇信仰が維持されており、それは「基層文化」の根強さを物語っているといえる。

このようにフィールドでの経験から、共時的に観察される事象を過去の海域交流の痕跡として通時的な観点からも考慮していく作業の重要性を認識していく中で、改めて中国における「漢化」の歴史と未だ生活文化次元で維持されている「基層文化」に関心を持つに至った。その過程で、福建省南平市の樟湖坂にある蛇王廟の蛇祭を参与観察する機会を持ち、それを通して中国東南地域の村落で生活文化についてのフィールド経験を得ることができ、基課題を発展させる契機を掴んだ。そこで、長い「漢化」の歴史にも拘わらず、それ以前の文化が潜在すると考えられる中国の東南地域で、基課題を発展させるための現地調査を計画するに至った。

2. 研究の目的

採択中の基課題「東シナ海域の基層文化と人々の生活：日韓境界領域の事例より」（基盤研究C、15K01870）を発展させ、東シナ海域の「基層文化」を中国の事例を含めて再考するために中国でフィールドデータを収集することである。そのために、中国の共同研究者の協力の下に、中国に滞在し、現代中国について経験レベルでの学習を行いつつ調査準備を進め、古代以前に遡る海域交流において日本列島・朝鮮半島との関わりが深い中国江南（東南地方）の村でフィールドワークを行う。ここでも基課題と同様、生活文化の観点から「基層文化」を見直すために設定した4つの指標（①同年齢集団・関係、②キンドレッド（父方・母方の親戚関係）、③人々が自主管理するムラの宗教的センター、④女性の役割（③との関連）を主に調査し、日中韓の国境を越えて広がる共通の文化的基盤を再考するための基礎資料を収集する。

3. 研究の方法

(1) 方法論的観点：

海域研究は、近年、歴史学者を中心に一国史観を乗り越える枠組みとして注目され、国際的研究も行われている（小島監修・吉尾編 2011『（東アジア海域叢書）海域世界の環境と文化』等）。しかし、実証史学には文献に記されない生活文化を解釈できない限界が見られ、これについては、人々の生活に密着して参与観察を行う文化人類学のフィールドワークが有効といえる。一方、近年の文化人類学においては、構築主義的観点から文化形成の恣意性や諸力のせめぎ合いについて記述・分析する傾向が見られ、「基層文化」を本質主義と否定する向きも見られる。

これに対し、本研究では、「基層文化」を表層からは見えにくい、長期的な時間サイクルの下で生活文化に深く埋め込まれてきた深層次元の文化であると捉え、古代或いはそれ以前に遡る

「グローバル」な広がりを持った海域共通の文化的基盤として再解釈することの積極的意味を見出したい。現在までそれが潜在的に維持されてきた普遍性は何に根差すのか、フィールドで観察される共時的な事象について、それを背後で支える通時的な諸過程を踏まえて検討していくためには、中国江南と朝鮮半島及び日本列島の間の人やモノ、情報などの諸交流に関する歴史的な研究成果への目配りも重要となる。これについては、戦前からの文化史的な研究の蓄積があり、上記した鈴木氏の研究もそうした東シナ海域の「基層文化」に関する礎となった研究の上に成立している。とはいえ、国民国家の枠組みを相対化するような新たな海域研究の動向は近年のことであり、それ以前の東シナ海域の「基層文化」に関する先行研究には戦前の「植民地状況」や戦後の国際情勢などの影響が少なからず見られる。よって、このことを十分踏まえつつ、戦前に遡る古典的な研究の内容や調査データを生活文化の観点から見直すことで、国家横断的研究としての海域研究の発展に寄与しうるフィールドデータの発掘を試みた。

(2) 調査方法：

フィールドワークを基本とする。研究代表者はこれまで主に日本と韓国での調査を行ってきたため、中国での生活・調査経験はほとんどなく、中国語や現代中国についての学習も不十分である。よって、以下のような手続きをとった。

1) 中国渡航前の準備：

東シナ海域の「基層文化」に生活文化の観点からアプローチする上で重要だと考えられる中国を事例とする研究動向や中国でフィールドワークを行う上で必要な文献や情報収集を行った。

2) 中国でのフィールドワーク実施前の準備：

浙江大学を拠点にして、フィールドワークを実施するための準備を整えた。ここでは、中国での日常的な生活に慣れることはもとより、中国の共同研究者との意見交換をはじめ、大学内で開催される会議や共同研究等への参加を通して、本研究に関する資料・情報収集に努めた。また中国東南地域のどの村落で調査を実施するかについて先行研究を踏まえながら検討した。当初候補地と考えていたのは以下の地図にある浙江省と福建省のムラである。

まず左図は、上記した鈴木氏の書籍の目次裏頁から引用したもので、これらは鈴木氏が訪れた浙江省のムラである。この他に、福田アジオ氏を代表とする共同研究の成果報告書（福田アジオ編 2006『中国江南沿海村落民俗誌：浙江省象山区東門島と温嶺市箬山』、2022『中国江南山間地域の民俗文化とその変容：浙江省江山市廿八都和龍游県三門源』）が報告した事例のムラも検討対象とした（右図に青色で図示）。次に右図は、野村伸一編『東アジアの女神信仰と女性生活』（2004：137）から引用したもので、これらは野村氏らの儀礼・祭祀を中心とする事例研究が取り上げた福建省のムラである。赤囲いは前述の蛇祭の参与観察のため研究代表者がそれまで中国で唯一訪れた南平市である。



3) フィールドワークの実施：

中国に滞在中に国際情勢の変化などで外国人による調査がしにくい状況が出てきたことも考慮し、共同研究者である阮云星教授（浙江大学公共管理学院政治系、人類学研究所副所長）と安成浩副（准）教授（浙江大学人文学院、韓国研究所）と相談の上、両者の仲介或いは同行が可能なら以下の調査地の村落で実施することになった（上で引用した地図にA～Dで図示）。

- ・浙江省舟山市（舟山群島）にある蝦峙島・六横島（舟山市普陀区）（左図A）
- ・浙江省台州市三門県（左図B）
- ・麗水市青田県（左図C）
- ・福建省福州市倉山区（南台島）（右図D）

フィールドワークによる主な調査項目は、基課題と同様、生活文化の観点から東シナ海域の「基層文化」再考のための指標として設定した四項目、①同年齢集団・関係、②キンドレッド（父方・母方の親戚関係）、③人々が自主管理するムラの宗教的センター、④女性の役割（③と

の関連))である。

4. 研究成果

(1) 受け入れ先機関（浙江大学）内の共同研究への参加を通じた情報収集：

浙江大学のアジア研究センター（亜洲研究中心）が編者となり、中国国内外の高麗仏画の研究者たちの協力の下に出版された『高麗画全集 欧米蔵品巻』（2018）の翻訳・校正を行ったことである。この全集は、欧米に所蔵されている高麗仏画を取めたもので、仏画が欧米諸国に収蔵されている背景や経緯を学術的に説明する論文のほか、全作品ごとの学術的解説が中国語、英語、韓国語、日本語で記されている。中国語・英語・韓国語で書かれた原文を相互対照させながら日本語に翻訳・校正を進める過程で、高麗時代の仏教及び仏画の普及・流通過程を支えた当時の社会背景や国際関係をはじめ、東シナ海域の諸交流と深く関連する学術的な資料を収集し、理解する必要があったため、東シナ海域の交流史についての認識を深めることができた。

(2) 中国国内での会議での発表と講義の実施を通じた情報収集：

自身の研究を発信・紹介し、中国の研究者や学生と意見交換する機会を持つと共に、それを通して中国の人々が東アジアの海域交流についてどのように考えているのか情報収集することができた。まず会議発表としては、台州市で開催された日韓中の三国の研究者らが集まる国際会議（2018年5月）で、基課題に関わる内容を「東中国海域研究所見済州島村落調査的意義及課題」（東シナ海域研究から見る済州島村落調査の意義と課題）というタイトルで発表した。次に、講義としては、浙江大学の学部生を対象とする授業「東亜海上交流と文化」の一環として特別講義「従『海域』所見文化的共同基礎」（「海域」からみる文化的な共同基盤）を実施した（2018年6月）。

(3) フィールドワークを通じた情報収集：

浙江省舟山市（舟山群島）普陀区海域の蝦峙島及び六横島の村落、浙江省台州市三門県の村落、C浙江省麗水市青田県の村落、福建省福州市倉山区（南台島）の村落でフィールドワークを実施した。何れにおいても、本研究にとって有益かつ貴重なフィールドデータを得ることができた。ただ、生活文化へのアプローチから東シナ海域の基層文化を明らかにするために、フィールド調査上の観点として設定した4項目（①同年齢集団・関係、②キンドレッド（父方・母方の親戚関係）、③人々が自主管理するムラの宗教的センター、④女性の役割（③との関連）のうち、何れの調査地でも③と④を確認することができたが、①と②については、特に福州市倉山区で興味深いデータが収集できたものの、さらにインテンシブな研究の必要性が認識された。とはいえ、何れの調査地でも次の調査に繋がる足がかりを得ることができた。特に、東シナ海域の「基層文化」を再考する上で、無縁仏の信仰や儀礼が重要であることを改めて認識し、それに関する重要な先行研究（鈴木満男 1972「盆にくる霊：台湾の中元節を手がかりとした比較民俗学的詩論」『民族学研究』37（3）、志賀市子 2012『〈神〉と〈鬼〉の間：中国東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』など）に紹介された事例と対照させながら、さらなる知見を深めることができた。

上記した四つの調査地の中でも、福州市倉山区（南台島）の村落（義序）で実施した現地調査は比較的深くムラの中に入って参与観察を行うことができた。そこで得られた様々なフィールドデータの中でも、女性中心の祭祀に関連して貴重なデータが得られた。これは当地で本格的なフィールドワークを実施した中国の第一世代の人類学者・林耀華の民族誌（1935『義序の宗族研究』）に照らしても大変興味深いものである。なぜなら、林の民族誌は一般にはM・フリードマン（1958『東南中国の宗族組織』）のリネージ・モデルの形成に影響を与えた単姓村を取り上げたことで知られているが、林は義序を「宗族郷村」と表現し、「血縁」と「地縁」両方の観点からデータを収集しており、そこには姻族との繋がりや女性たちの祭祀や儀礼に関する記述も少なくないからだ。そして、林氏の民国期の調査から約60年後、義序で「宗族」が再興したことの政治学的意味を検討するために、宗族の組織化についての共時的・通時的研究を行ったのが、本研究の共同研究者である浙江大学教授の阮雲星氏（2005『中国の宗族と政治文化：現代「義序」郷村の政治人類学的考察』）であるが、阮氏もこのことを認識していた。そこで、今回共同で調査を実施し、改めて林の民族誌に記されたデータの意味をジェンダー人類学的な視座から見直すことになったのである。そこで、本調査結果の一部を阮氏と第31回日中社会学会のシンポジウム（2019年6月）で「当代“宗族郷村”的“半边天”：基于福建義序民俗个案的性别人類学研究」（現代「宗族郷村」を支える女性たち：福建省福州市義序における民俗宗教の事例に基づくジェンダー人類学的研究）というタイトルの下に発表した。

さらに、上記発表での反省点を踏まえ、また舟山群島の蝦峙島でも参与観察できた女性中心の祭祀や信仰実践をも念頭に、改めて福州市倉山区で参与観察した女性中心の祭祀について検討を加え、東アジア人類学研究会第6回大会（2019年12月）で発表した。ここでは、中国で現地調査を実施している研究者たちから貴重な助言をいただくことができたが、それらの助言から、東シナ海域の基層文化に生活文化の観点からアプローチするという本研究の方法や課題を発展させる上で必要だと考えられる文献研究や現地調査について様々なヒン

トを得ることができた。そして、このことを踏まえつつ、今後も中国での調査研究を継続する上で重要な新たな科研費の獲得に向けて研究計画書を作成した。その結果、2020年度からの科研費の研究（基盤研究C、課題名は「東シナ海域の文化伝統の再考：女性主体の共同祭祀に関する日韓中境界領域の事例比較」）の採択へと結び付けることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金明美
2. 発表標題 「宗族郷村」における民俗宗教の実践に関する一考察：義序の事例についてのジェンダー人類学的視座からの解釈の試み
3. 学会等名 東アジア人類学研究会第六回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阮雲星・金明美
2. 発表標題 当代“宗族郷村”的“半边天”：基于福建義序信俗个案的性別人類学研究
3. 学会等名 第31回日中社会学会学会企画シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金明美
2. 発表標題 東中国海域研究所見濟州島村落調査的意義及課題
3. 学会等名 中国浙江地区与韓国友好交流国際學術會議及崔溥漂海登陸530周年紀念会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 浙江大学亜洲研究中心編（日文審校：金明美、金井五郎）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 浙江大学出版社	5. 総ページ数 362
3. 書名 『高麗画全集 歐美藏品巻』 ISBN 9787308175579	

〔産業財産権〕

〔その他〕

- 1、研究室HP（研究紹介）
http://www.inf.shizuoka.ac.jp/labs/society_detail.html?CN=153394
- 2、浙江大学の授業科目「東亜海上交流与文化」で特別講義「從『海域』所見文化的共同基礎」を実施（2018年6月）
- 3、浙江省杭州市良渚遺跡の日本語版の案内図等作成の調査・校正協力（2018年6月）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	阮 云星 (Ruan Yunxing)	浙江大学・公共管理学院社会学系・教授	人類学研究所副所長
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	安 成浩 (An Chenghao)	浙江大学・人文学院・准教授	韓国研究所